



第 34 号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町 3-100

〒447-0087 : TEL. 0566-41-8522

: FAX. 0566-41-7761

## ある劣化

久野 昭

(国際日本文化研究センター名誉教授、  
広島大学名誉教授、哲学たいけん村無我  
苑顧問)

かつては、原稿を書くのに万年筆を用いた。出版社から送られてきた二百字詰原稿用紙の罫目の色や形態、紙へのインクの滲み具合などを気にしながら、さらに無論、書く内容に気を使いながら、途中で何度も原稿用紙を破って捨てては、また改めて書きつづけるという作業だった。その後、日本ではボールペンと呼ばれるボールポイント・ペンが流行りしたが、この筆記具で原稿を書いたことはない。

そのうちに原稿は書くものではなく、打つものになってきた。日本ではワープロと呼ばれる自動文書作成装置、すなわちワード・プロセッサが普及したからである。だが、文房具の発達は目まぐるしく、いまでは日本語でパソコンと呼ばれる個人用小型電子計算機のパーソナル・コンピュータが、原稿執筆の主流である。もっとも、私はいまだにワープロで原稿を打っている。この小文も例外ではない。鉛筆はと言えば、メモをとるのに使用する程度だったのだが、二年ほど前から、原稿とは別に、鉛筆と消しゴムを使う機

会が増えた。暇な時に、世に「ナンプレ」とか「数独」と呼ばれているパズルに挑戦するようになったからである。ヨーロッパの新聞のいくつかに「SUDOKU」欄があるのに気づいて、それに挑戦したのが、きっかけになった。

ところが、書店で売られている「超難問」とか「極限」とか銘打った数独問題集になると、どうしても罫目に鉛筆で数字を書き込んで、消しゴムで消してはまた書くという作業が必要になる。そこで、机の引出しに二十年ほど眠っていた消しゴムを探し出して、あらためて使うことになったのだが、ここで困ったことが起きた。

鉛筆の芯は黒鉛と粘土との粉末を混ぜ合わせて高熱で焼いて造るそうだが、その芯の黒い物質が消しゴムに付着して、罫目に書き込んだ数字を消した部分に黒い汚れが拡がる。悪いのは紙か、鉛筆の芯か、消しゴムか。消すたびに一々、別の有り合わせの硬めの紙をその消しゴムで擦って、それで消しゴムに付着した黒を除去するのは、すこぶる面倒である。数カ月にわたる苦闘の末に、科学的根拠の有無はともかく、勝手に、どうやらこれは消しゴムがあまりに古いからだとの結論に達した。とすれば、ゴムの老化ということになる。長い年月を経ると、消しゴムもまた老化するのか。

消しゴムもまた、と思つたのは、世に長らえて老化するのは、なにも消しゴムだけではないとの認識があるからである。老化には、硬化にせよ、軟化にせよ、粘

着にせよ、ひび割れにせよ、品質の劣化という現象がともなうのが通例であろう。そして、老化による劣化と言えば、人間もだから自分も、という思いはある。これは切ない。漢字の「劣」は「少」と「力」とから成り、力が少ないことを意味する。「化」は「人」と逆さまに書いた「人」とから成り、もとは人が変わることを意味した。とすれば、「劣化」は本来、人の力の衰えていく形容にこそ相応しい。

しかも、敢えて言うが、加齢による老化の所為として簡単には片付けきれない類の、不自然な人間の劣化が、最近、私を不安にしている。消しゴムとは違って、人間には、もつと自分で突き詰めて考える力があつてもいいと思うのだが、思慮のかけらも感じとれない無責任な政治的発言や、事故故が起こると聞こえてくる「想定外」という便利な言葉や、満員電車の中だろうと歩道を自転車で行って、片手に持った携帯電話の類から眼を離すことのない迷惑な連中など、人間のもろもろの言動から透けて見える劣化である。消しゴムなら引出しの片隅に入ってしまった片付くが、人間はそうもいかない。だから、不安なのだ。だから、他人はともかく、自分の思考力だけは劣化させまいと、私は一所懸命になっている。ついだが、近頃は「一生懸命」が正しく「一所懸命」は間違いだと思ひ込んで、思考力の劣化した馬鹿が多いが、自らの生命を敢えて一つ所、一つの事柄に懸けるからこそ「一所懸命」なのだ。馬鹿につける薬はない。

# 梅原猛名誉村長特別講演会

## 演題 「親鸞 その人生と思想」

平成二十四年十二月一日に碧南市芸術文化ホールにおいて、哲学者で、哲学たいけん村無我苑名誉村長の梅原猛先生による特別講演会を開催しました。特別講演会の詳細については、以下の要約をご覧ください。



### 日本人は死をどう考えてきたか

演題は「親鸞 その人生と思想」であるが、ここでは主として親鸞の思想について語りたい。人生については、

私の著書『梅原猛の仏教の授業 法然・親鸞・一遍』（PHP研究所）を読んでいた。だいたい、

親鸞の思想の中心には、念仏をすれば必ず極楽浄土に往生できるという思想がある。それは死を克服する思想である。その思想の特徴を明らかにするために、日本人が古来、死をどう考えてきたかを知っておく必要がある。

日本人は、人が死ぬと、ひと足先にいった祖先が待っているあの世へ行くと考えていた。あの世はこの世と万事あべこべであることを除けば、この世とあまり変わらない。私は子どものころ、着物を左前に着たり、水にお茶を加えて薄めたりすると、「死人の真似をしてはいけない」と母からひどく叱られた。今でも、葬式において故人の茶碗を割る風習がある。このようなあの世の思想が最近まで残っていたのである。

あの世では祖先たちがこの世と変わらない生活をしている。この世の子孫の女性が妊娠すると、あの世で祖先たちが会議を開き、誰を帰すかを相談す

る。そこで選ばれた祖先の霊が妊婦の腹に宿り、子孫として生まれてくる。生まれた子が祖父に似ていると、「この子はおじいさんの生まれ変わりだ」となどと語られる。

このような生まれ変わりを考えると、あの縄文の土偶の謎も解けるのである。

### 法然の浄土教

日本ではインドや中国における仏教と違って、浄土教が大変盛んであった。平安時代の僧、源信の書いた『往生要集』が大ベストセラーになり、紫式部の『源氏物語』などもその影響を受けている。源信は、念仏をすれば極楽浄土に往生できると考えたが、その念仏は主に阿弥陀仏及び阿弥陀仏のいる極楽浄土をイメージすることであった。

しかし法然は、そのような念仏では特定の者しか往生できないので、念仏は口で「南無阿弥陀仏」を称える口称念仏であるとした。口称念仏とされることによつて念仏は易行となり、いか

なる人間も極楽往生が可能になった。それまではとても往生できないとされていた悪人や凡夫、仏教において差別されていた女人も、往生できることになった。

法然は、パトロンである九条兼実の求めに応じて『選択本願念仏集』を書いた。それは甚だ論理的ですっきりした書である。

### 親鸞と法然

法然は美作国の庶民の出身であるが、親鸞は日野氏という中級貴族の出身である。親鸞は、九条兼実の同母弟であり四代にわたつて天台座主を務めた政治僧、慈円の弟子となった。親鸞の出世は約束されていたが、彼は二十九歳のとき、乞食僧というべき法然の弟子となった。

そして法然が流罪になったとき、三十五歳の親鸞も遠流、すなわち重い流罪である越後への流罪に処された。その四年後、法然も親鸞も罪を赦され、八十歳の法然は都に帰還したが、まもなく死んだ。

親鸞は常陸に行き、そこで布教した。そして六十歳ころ、親鸞は帰京したが、京ではほとんど布教しなかった。その代わり、彼は不朽の名作というべき『顕浄土真実教行証文類』すなわち『教行信証』全六巻を書いた。『教行信証』と親鸞が書いた和讃、及び京都にいた親鸞が関東にいる門人に宛てた書簡が、

親鸞の思想を理解する主な資料になる。

## 歎異抄と教行信証

従来、親鸞は『歎異抄』を中心に理解されてきた。しかし『歎異抄』は親鸞の弟子、唯円の著である。唯円は親鸞の親戚筋にあたり、京都へ帰った親鸞の秘書のような役割をした。唯円は、親鸞の死後三十年にして、親鸞の思想にあらざる異端の教えが浄土真宗教団ではびこるのを嘆き、自身が長年見聞きした親鸞の言行を記したのが『歎異抄』である。

『歎異抄』の第三章にある有名な「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という言葉が甚だ印象的であったために歎異抄ブームが起こり、親鸞は再発見されたといつてよい。

しかし親鸞を知るには、唯円の書いた書ではなく、親鸞自身の著書、特に『教行信証』に依らなければならない。『歎異抄』を中心とする親鸞理解は間違いないとしても、甚だ浅薄であり、親鸞思想の本質には届かない。

## 『教行信証』の特徴

『教行信証』は不思議な本である。その八割強は経典からの引用である。にもかかわらずそれは、末世に要求される仏教は何かという問いに答える、浄土教を中

心とする仏教概論になっている。

そればかりか、そこに親鸞の人生の悩みと喜びがみごとに描かれている。甚だ厳格な体系性をもつ書物であるのに、親鸞の人生が描かれた長編小説を読むような趣がある。

特に「信」の巻は興味深い。親鸞がもっぱら依っている「大無量寿経」においては、念仏を唱えればすべての人が極楽往生できると語られるが、五逆と正法誹謗の者を除くとある。五逆の第一は父殺しである。その父殺しの悲劇を扱ったのが「観無量寿経」であり、そこに登場するアジャセ王は父のピンピサラ王を殺し、母のイダイケを幽閉した大悪人である。「大無量寿経」によれば、このような父殺しの大悪人は念仏を唱えても往生できない。しかし親鸞はこの父殺しの大悪人を救おうとして、『教行信証』において「大般涅槃経」を長々と引用し、アジャセ王は懺悔することによって成仏できたと語る。

それを読むと、親鸞はあたかもアジャセ王と自己を同一視しているような感がある。私は五十年來、何度か『教行信証』を読み、この点が大きな謎であった。

最近、吉良潤氏により、親鸞の母方の祖父が源義朝であるという説が発表されたが、その説についてここで詳しく語ることはできない。もし親鸞が義朝の孫であるとすれば、彼は父殺しという五逆の罪を犯した悪人を祖父にもつたことにな

る。なぜなら、義朝は保元の乱によって父為義を殺したからである。

また親鸞が東国にいた時代の権力者、北条氏などによる父を殺し子を殺し、兄弟やおじを殺すという事件が相次いだ。このような状況において親鸞は、人を殺すという原罪を思い知ったのである。そのような悪の自覚は、暁鳥敏などの「悪人正機説」を唱えた近代浄土教学者の悪の自覚とはまったく違う。

## 二種回向の説

親鸞が『教行信証』で語る説は二種回向の説である。阿弥陀様のおかげで、人間は念仏を唱えれば極楽往生できる。それが往相回向である。しかし極楽浄土に行つた人間は、そこに長くどどまることはできない。仏教は自利利他の教えであるので、極楽浄土に長くどどまって自利の楽しみに耽るわけにはいかないのである。

極楽に入る門は同時に極楽から出る門である。この世に悩める人がいるかぎり、またこの世に帰る、悩める人を救わねばならない。それが還相回向である。念仏の徒、特に僧は悩める人を救うためにこの世に帰ってきた人間である。

親鸞はこの往相回向と還相回向を併せて二種回向とした。

法然は、一度目は釈迦が説く「大無量

寿経」の聴衆の一人としてインドに生まれ、二度目は浄土念仏の教えを広めた善導として中国に生まれ、三度目は口称念仏の創始者として日本に生まれたと自ら語る。親鸞も自らを聖徳太子の生まれ変わりと考えた跡があり、『親鸞聖人正明伝』では、道綽の生まれ変わりであったと記される。

この生まれ変わりという考え方は日本古来の死に対する考え方と共通するところがある。古来の生まれ変わりは血の原理によって行われ、浄土教の生まれ変わりは法の原理によって行われると考えられる。

## 生まれ変わりと遣伝子科学

二種回向の説は、現在の浄土真宗の仏教者によってほとんど語られない。なぜなら、科学思想の影響を受けた現代人には、死んで極楽浄土に行くという説は受け入れ難い。ましてそこからこの世に帰ってくるなどということは甚だ非科学的なことと考えられ、親鸞仏教の中心思想である二種回向の説はほとんど語られない。

しかし私は、往相回向と還相回向を語るることによって、現代科学の説に通じるのではないかと思う。私の命の本質は遣伝子であるが、その遣伝子は生命の誕生以来、何十億年という旅を続けてきたわけである。そしてまた子や孫がいるかぎ

り、その遺伝子は未来において無限の長い旅をするはずである。私の生命はその中に過去の永遠と未来の永遠を宿しているのである。それは実に尊いことであり、また甚だ不思議なことである。

この永遠を仏教では仏性というのである。まさに「涅槃経」で説かれる「一切衆生悉有仏性」は、このような遺伝子の永遠性を物語っているのではなからうか。それゆえこの命は実に尊いのである。

この命をわれわれは大切にしなければならぬ。他人や自分を殺すようなことは永遠すなわち仏性への冒瀆であり、決してしてはならない。そしてこの遺伝子は未来においても無限に旅をすることに、なるが、その旅には苦しいことも楽しいこともある。どのような夢多き旅をするのか甚だ楽しみである。

私は現在米寿であり、残された人生はもうあまり長くない。その残された旅の日々に、できるだけ利他の行を行い、生を終えたいと思っている。

### 瞑想回廊企画展示

平成二十四年度に開催した瞑想回廊企画展示をご紹介します。瞑想回廊企画展示は、哲学たいけん村のコンセプトに則り、訪れた人の「視覚」と「感性」に訴えかける美術展として、開村以来毎年開催しています。平成二十四年度は、第三十七、三十八回目の企画展示を開催しました。

#### まなざし

#### 近藤 幸 木版画展



作品「水上」

七月十八日から九月十七日にかけて第三十七回企画展示「まなざし」近藤幸木版画展を開催しました。

近藤氏は、徳島県出身の版画家です。教職の傍ら精力的に国内外で活躍されています。

今回の展示では作品四十四点を展示していただきました。静謐な深海や夜の空

気を思わせるような青い世界が瞑想回廊に広がりました。落ち着いた青い作品と向き合いながら、同時に自分自身の内面と向き合う。そんな時間を持っていた、大切な時でした。

### Self Healing IV

#### 落合晶代展

平成二十五年一月十七日から三月二十四日にかけて第三十八回企画展示「Self Healing IV」落合晶代展を開催しました。

落合氏は、大学在学中の平成十七年に日展に初入選し、現在は名古屋、長久手市を中心に活躍されています。

タイトルの「セルフヒーリング」には、観た人の心が浄化されるような作品、空間を演出したいという落合氏の気持ちが込められています。期間中、淡く繊細で



バイオリンコンサート 出演 大竹広治氏

やさしい色彩が来場者を包みました。また、絵画と音楽の競演を図り、会場内でバイオリンのコンサートを開催しました。絵を観て、音楽を聴いて感じたご自身の大切な感覚を今後も大切にしたいだけたらと存じます。

#### 伊藤証信

#### 梅原猛名誉村長 常設展示

哲学たいけん村無我苑にゆかりのある伊藤証信と梅原猛名誉村長とを紹介する常設展示。平成二十四年度はそれぞれ次の展示を行いました。

#### 伊藤証信常設展示

遺品の紹介を通じて、伊藤証信の生涯を順に紹介しています。今回、経済学者の河上肇や歌人の平塚らいてふ等との関わりを示す遺品を紹介しました。

#### 梅原猛名誉村長常設展示

梅原猛名誉村長の著書『歓喜する円空』と『水底の歌 柿本人麿論』の内容について紹介しました。



梅原猛名誉村長常設展示

### 開村二十周年記念茶会

平成二十四年六月一日。哲学たいけん村無我苑は、開村二十周年を迎えました。これを記念して、十月十三日、十四日に記念茶会を開催しました。当苑の市民茶室「涛々庵」（とうとうあん）をより多くの方に知っていただくという趣旨もあり、席主には当苑茶室の特徴である「露地囲い」を使用した茶席を設けていただきました。



濃茶席（裏千家）の様子

箏曲が流れる苑内には、趣向を凝らした茶席がそれぞれ設けられました。両日とも天気にも恵まれ、県内外から多くの方にご参加いただきました。

今回の記念茶会では、中村昌生先生（当苑茶室設計監修者）に当苑茶室の紹介文を寄稿していただきました。また、席主の先生方を始め、碧南文化協会茶道部の皆様にも全面的な協力をいただきました。この場を借りて、改めてお礼申し上げます。

十月十三日

濃茶席・薄茶席（市民茶室涛々庵）

席主 神谷宗儀氏（裏千家）

煎茶席（研修道場安吾館）

席主 杉浦紀翠氏（煎茶道松月流）

十月十四日

濃茶席・薄茶席（市民茶室涛々庵）

席主 吉田生風庵（表千家）

煎茶席（研修道場安吾館）

席主 小笠原芙仙窟氏（煎茶道売茶流）

### 「観月の会」 出演

津軽三味線奏者 白井勝文氏



平成二十四年九月二十九日、哲学たいけん村無我苑瞑想回廊前中庭にて、「観月の会」を開催しました。今回は、津軽三味線奏者の白井勝文氏に出演していただきました。

ライトアップされた竹林を背景にして、津軽じょんがら節等、津軽三味線の代表的な曲や白井氏のオリジナル曲を演奏していただきました。また、津軽三味線の歴史についての解説や清水次郎長の義侠心に富んだ逸話を弾き語りで披露していただくなど多彩な内容を織り交ぜたコンサートでした。

### 涛々庵茶会・三曲定期演奏

お知らせ

涛々庵茶会は無我苑の市民茶室涛々庵（とうとうあん）を使用した市民茶会です。毎月席主によってそれぞれに創意工夫がなされ、華やかな茶会となっております。また、茶会に華を添える箏、三弦、尺八による三曲の定期演奏も研修道場安吾館にて行っています。

平成二十五年度の涛々庵茶会は、毎月第四日曜日（十二月のみ第三日曜日）に開催します。料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで（立礼茶席は十六時まで）です。三曲の演奏はお茶会にあわせ随時観覧無料で行っています。お茶会の作法についてご存知ない方もお気軽にご参加いただけます。また、三曲の演奏はお茶会に参加しない方もお聞きいただくことができます。是非、一度涛々庵茶会の雰囲気をお楽しみください。

### 平成25年度涛々庵茶会・三曲演奏予定表

月日	涛々庵茶会		三曲演奏
	席主	流派	出演団体
4月28日	杉浦 時子（宗時）	宗徧流	山本加代子社中・竹秀会
5月26日	小島 和美（宗美）	裏千家	祥友会・竹秀会
6月23日	澤田 教子（宗教）	表千家	絲音の会・竹秀会
7月28日	小沢わさ子（宗和）	松尾流	若草会・竹秀会
8月25日	磯貝 勝代（宗代）	裏千家	祥友会・竹秀会
9月22日	小笠原芙美（宗文）	久田流	菊香次社中・竹秀会
10月27日	神谷美枝子（宗美）	表千家	若草会・竹秀会
11月24日	小林ミサ子（宗実）	裏千家	絲音の会・竹秀会
12月15日	杉浦紀代子（紀翠）	煎茶道 松月流	祥友会・竹秀会
平成26年 1月26日	杉浦 伸子（宗伸）	裏千家	若草会・竹秀会
2月23日	藤原知香子（宗知）	裏千家	絲音の会・竹秀会
3月23日	永井いく子（宗郁）	裏千家	祥友会・竹秀会

## 伊藤証信の遺品

## 証信愛用の囲碁道具

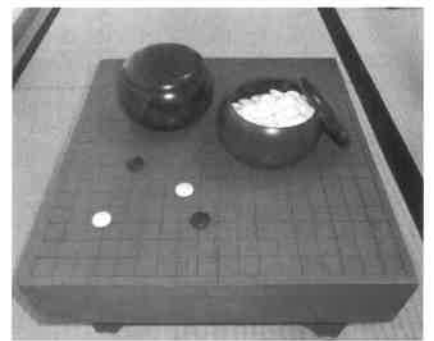
「囲碁の道具一揃えを贈ったことがあったが、その碁盤も石も遺愛品として、今も西端の無我苑に在ることと思う」(千葉耕堂著『無我愛運動史概観』二二七頁)

証信の妻あさ子が、千駄ヶ谷で病気を患い出した頃(明治四十四年)、千葉耕堂という青年が我生活社によく出入りしていた。この囲碁道具は、その耕堂が『僧界雑俎』という雑誌を編集していた折、証信に「囲碁と人生」という随筆を書いてもらったお礼に贈ったものである。

## 唯一の道楽は囲碁

伊藤証信は、三重県員弁郡久米村(現桑名市)の農家の家に長男として生まれ、体が弱く、百姓を継ぐことを断念し、寺の小僧に入りました。真宗大学まで進みましたが、無我愛の啓示に打たれ、真宗を脱宗しました。その後、あさ子と共に自らの信じる無我愛運動の伝道に生涯を尽くしました。

証信は謹厳実直で、煙草も吸わず、酒も盃に二、三杯であったと言われます。道楽や娯楽を持ちませんでした。ただ一つ、囲碁だけは好きでした。晩年、無我苑を訪れた初対面の男性客を見ると、碁を打つ指まねをして客が碁の趣味を持つているかを確認したのです。



ただ、そこは哲学者、彼にとつて碁盤は決して遊ぶための道具ではなかったのです。昭和三十四年九月十日付けの『無我愛』に「無限大宇宙たる碁盤上で、無我愛の囲碁を楽しもう」という含蓄のある論説を述べています。

昨年、碧南市史資料調査室から発刊された『伊藤証信物語』にも、そのへんのこと触れられています。

## 囲碁は新しい民主主義の生活

右で紹介した証信の論説の中で、「将棋は古い封建主義時代の生活に似て居り、囲碁は新しい民主主義の生活によく似て居ると思います」、さらに「碁石の並べ方と人間生活の運び方との上に、共通した処が多くありますから、現代及び今後の民主主義の社会及び世界に処する上において、囲碁の遊びが大いに参考になるのがあります」と述べています。

なるほど将棋は、味方の王将を守り、相手の王将を奪い取ることが目的の遊び

です。駒一つひとつに金、銀など身分階級がきつちりと決められていて、まさに将棋は封建社会そのものだと云えます。

一方囲碁の碁石は、黒石百八十一個、白石百八十個ありますが、どれも全く同じ身分で公平です。先に紹介しました『伊藤証信物語』の中で、「人間生活というのは、白対黒、つまり『私』と『相手』という人間関係の中で、喜怒哀楽を繰り返しているようなものじゃ」と証信が語る箇所があります。

戦前、戦後と生き抜いた証信の人間や社会を見る目の確かさに驚かされます。

## 宇宙は碁盤

証信の最晩年の研究テーマは、「人間は死んだら何処へ行くか」でした。つまりそれは靈魂としての意識の考察であり、実証でもありました。

証信はそのことについて、先に挙げた論説で次のように述べています。「我々の意識主体の宿り場所は、大きさが無くても只位置だけを示す最単素粒子であるとするれば、それは碁盤の上の縦横の線の交わる幾何学的の一点であります」。

証信は、人間が死ぬと、その人間が一生行ったことが凝縮された種となり、次に自分を産んでくれるちょうど良い親の所(宇宙の碁盤のタテとヨコ線の交点)に宿るのだと言っています。

つまり宇宙を碁盤に例え、これら無数の点の一つひとつに不滅の意識、魂が宿つて、絶えることなく無我愛運動を続けているのだというのが証信の宇宙観です。

## 傍目八目

証信は真宗を脱宗し、自ら得た「無我愛」の信念を貫き通した人です。いわゆる一宗一派、大学人にも属さず、自由人として一生を終えました。

これは言い換えれば、ある専門分野の主流に身を置かず、常にその傍らからもを見ていたと言えます。晩年、大変懇意にしていた森信三が証信のことを「野の哲人」と称したことからも伺い知ることができます。

囲碁から作られたと言われる「傍目八目」という言葉があります。これは碁を打っている当事者より、その勝負を傍らで見ている者の方が、かえってよく手をよめると言うことを言っています。

この言葉は、まさに証信の生き様を象徴的に言い当てた言葉だと思います。

このように見えてきますと、証信にとつて、囲碁は単なる遊びではなく、彼の思想の全てであり、彼という人間そのものであったと思うのです。

今年証信が亡くなり、ちょうど五十年目になります。今、証信愛用の碁盤を前にしますと、真剣に盤上を見つめる証信の顔と、碁石を打つパチンという響きが聞こえてくるようです。

(参考資料)

『無我愛運動史概観』、千葉耕堂著、音羽サービスセンター、一九七〇

『伊藤証信物語』、浅井久夫著、碧南市教育委員会、二〇一二